
胡蝶の夢・アレンジ版

どんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶の夢・アレンジ版

【Nコード】

N2628R

【作者名】

どろぐり

【あらすじ】

良介と千春の、とある日の出来事。もしくは夢。

(前書き)

良介：主人公。会社員。

千春：バツ一で子持ちの女性。

千尋：千春の娘。

ミユキハルトさんの『胡蝶の夢』に僕なりの解釈を加えてアレンジしたものです。投稿の許可をいただいたので、投稿させていただきました。

読んでいただけると光栄です。

それはまるで、記憶のような夢だった。
それはまるで、夢のような記憶だった。
そして確かに俺は、現実の中でそれらを見ていた。

~~~~~

指の間を黒髪がすり抜ける。それはさらさらと流れ落ちて千春の顔に掛る。妙に官能的な姿だが、今の俺はそんな気分ではない。

俺はただ、その髪の柔らかさを確かめながら、昨日みた夢の話をした。

蝶を追いかける夢だ。

自分でも、それは少しメルヘンチック過ぎるかと思ってしまうけれど。

「そうやって必死に走るんだけど、全然追いつかなくてさ」  
自分でもおかしいと思うくらい、柔らかかな声が出る。きつと、千春以外の前では、これだけ穏やかに、柔らかかな声を紡ぐことはできないだろう。

「結局、捕まえられなかった？」

俺以上に、柔らかかな声。女には敵わないな、と改めて思う。男はどれだけ気分が良くても、女の柔らかさには勝てないのだ。

「うん。子どもの頃、虫取り網をもって蝶を追いかけた覚えもないのに、何であんなにはつきりとした夢をみたんだろうって不思議に思った」

昨日見た夢を思い出す。子どもの俺が、蝶を追いかけている。小さな体で、宙をひらひらと舞い踊る蝶を必死で追いかけている姿には、なんの邪気もない。

自分にもこんな時期があったのかと、半ば自嘲してしまふ。残りの半分は、夢にもかかわらず感じる懐かしさ。本当に、実際にそんなことをしていたみたいに、もう一度そんなことをやってみたくなる。

千春は、くすくすと笑った。

「夢は夢じゃない。そんなふうに思うの、良介らしいわ」

その笑みがあまりにも優しく、俺の心をどこまでも溶かしている。こんなに優しい気分になれるのは、千春が目の前にいるから。そんなことを、強く思った。

「そうかな？」

「だって、ふつう真面目に考えないわよ、そういうこと。不毛すぎるもの」

俺も笑った。千春にそう言われると、自分が真面目に考えていることが馬鹿らしくなった。世の中はもっと単純で、こんな複雑な思考はいらないんだ。

そう、こうやって、ただ愛しい人を見つめているだけでいい。それ以上、面倒な思考はいらない。

「そうだね。夢は記憶の整理って言うし、もしかしたら覚えてないだけかもしれないし、ドラマとかを見ただけかもしれないしね。でも本当に、これは自分の記憶なんじゃないかって思うくらいはつきりしてたんだ」

本当に鮮明で、今日の前にいる千春と同じくらい、それは確かな形を持って俺の中で息づいていた。

「今はその夢、ちゃんと区別ついてる？」

「それがね」

そのとき、襖の向こうから泣き声が聞こえた。千尋が泣いている？

「ママあ」

「ちい？」

「どうしたんだろ？」

起き上がるうとした俺を、「大丈夫」と制して、千春は寝衣を整えて娘の様子を見に行った。

俺は天井を見つめた。灯りにつけられた紐が、下に長く垂れていくさまが懐かしかった。

千春と千尋の二人の住む部屋は、かつて俺が母と住んでいた部屋と外観が似ていた。玄関入ってすぐにダイニングキッチンがあつて、その奥が居間、右手が和室、そしてベランダ。

少し狭いが、子供と二人で住むにはちょうどいい広さの簡素な部屋だ。

俺がここに泊まる時はいつも三人で並んで眠るのだが、今夜は千尋が和室で一人で寝るのだと言い張った。話を聞くと、どうやら保育園の友達が、一人でも眠られることを自慢したらしい。

子どもだな、と思った。でも、そんな時期が自分にもあったことを思いだし、なんだか懐かしさも感じてしまった。蝶々を追いかける自分と、その姿が重なったのかもしれない。

『ちいもできるもん！ オトナだもん！』

幼い千尋の声を思いだし、思わず苦笑い。結構、無茶だと思った。千尋は夜闇が大の苦手なのだから。

俺は止めたのだが、千尋は宣言どおり実行に移した。だが、やはり眠られず、寝息が聞こえてくるまでずっと母の千春がそばにいた。その姿が、ちょっとだけ羨ましいな、と思つてしまったのは、俺が未だに母親への未練を断ち切つていないからだろうか？自分がマザコンであるという自覚はないが、まだまだ俺は母親から離れられていないのかもしれない。

襖を閉めて、彼女が布団に潜る気配がした。

俺は薄目を開けた。

いつの間にか眠っていた。

「ごめん、起こしちゃった？」

心底申し訳なさそうに、千春が言う。そんな顔しなくてもいいのに。俺と千春は、恋人同士なのだから。恋人は、同じ苦勞を分かち合うものだろう？

そう思いながらも、まだ遠慮のない関係をもてないことも承知しているので、別の言葉を言う。

「ううん。千尋、どうしたの？」

「怖い夢を見たって泣いてたの」

私が死んだ夢、と千春は言った。

その言い方は淡々として、その言葉の意味が感じ取れないくらいだった。

え、と思わず俺は聞き返した。

「死んだ夢？」

俺の驚きとは反対に、彼女は何でもないかのように、ふふと笑った。

「真顔で聞かないで。単なる夢よ。あの子、時々ああやって泣くの」

いや、でも……。

「よく見るってこと？」

俺は内心の動揺を隠せない。

「うん。……これは、私が子供の頃に聞いたことだから曖昧なんだけど、誰かが死ぬ夢を見るのってその誰かに対して自分が依存してるからなんだって。甘えたいとか離れたくないとか……なんかそういうことだったと思う。大事にしていることの表れ　　みたいなの」

感じかな。だから何も心配はいらないの」

「ほんとう？」

千春は一瞬、きょとんとした顔で俺を見た。それから微笑んで、俺の髪をなでた。

そのことが無性に嬉しくて、俺はされるがままになっていた。なんだかくすぐったい感じがした。

千春の柔らかな手を感じつつ、思う。俺はまだ、母とは縁を切れていないらしい。今の精神を持っていたとしても、幼い子供の体に入り、また母の姿があれば、その容姿相応の甘え方をするのだろう。

「わからない。私も昔よく見たことがあるんだけど、私、親と合わないから……。だから、真実味はゼロね」

一瞬、その笑顔が哀しげに見えた。その哀しげな顔が愛おしくて、俺は千春を抱き寄せた。温かな体温が、俺の心を満たす。

愛おしい。単純に、そう思った。

「……今、夢を見てた気がする」

「どんな夢？」

「千春さんが俺を抱きしめる夢」

そう言っつて、俺はやわらかな髪に鼻を埋め、清らかな甘い匂いを嗅いだ。

千春が恋人でなければ、きつとこんなことは気持ちが悪い行為なのだろう。でも、俺と千春は恋人で、こんなことをすることだって許される。不思議なものだ。関係がちよっと違うだけで、その行為の意味がまるで違うのだから。

千春の香りで、ふんわりと心がやさしくなる。

愛しいと思う気持ち、心を溶かしていく。

「すごく幸せな気分だった。風が吹いて冷たくなった俺の体を、

後ろから抱きしめてくれて、千春さんって温かいなって思った。…俺は、千春さんの手を握ろうとした。でも触れたら冷たくて俺の手だった」

俺の言葉に、千春はちよつとだけ訝しげな表情を見せた。

「……目が覚めたら自分の手を握ってた？」

「うん。それでも、不思議と悲しくなかつたんだ。逆に安心していた。温かいのと冷たいのと、その温度差に安心してた。ああ、これは夢なんだって……」

瞼が重かった。思いだしているうちに、そのまま眠りの入口に立ってしまつたらしい。

気が付いたら、彼女が顔を覗き込んでいた。

「良介、もしかして寝惚けてる？」

俺は首を振った。強がりだけれど。

「うそ。すごく眠たい目してるし、言葉がなんか素直すぎ。あ、それはいつものことか」

千春の言葉に、俺は苦笑い。

「こどもっぽいつてこと？」

「可愛いつてこと」

チュ、と彼女は俺の額にキスをした。柔らかくて、女性的なキス男がするのは、決してこうはならない。

いつもと違って、ただされるだけなのはくすぐりたい。そう思った。

俺は一度瞬きをした。

臃気な思考。

霞む視界。

甘い体のだるさ。

睡魔が意識を奪っていく。現実と夢のはざままで、俺は意識を繋ぎとめる。

赤子が乳を求めるように、俺は無意識にその唇を探していた。

「良」

キス。

熱い吐息を絡ませ、密やかに想いを交わすのではなく、浅くもなく深くもなく、ただ愛を告げるように温もりを重ねた。その瞬間、そっと彼女の中で呼吸する自分を感じた。

気がつけば、頭の後ろがゆっくりとなでられている。その愛撫は、子守唄のようにやわらかな眠りを誘う。

「おやすみなさい」

閉じた瞼の裏で声を聞く。

腕の中の温もりを、離さないように抱きしめた。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

ミユキハルトさん、素敵な物語をおかしいいただき、感謝しています。書いていて、意外と面白かったです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2628r/>

---

胡蝶の夢・アレンジ版

2011年10月8日19時14分発行